



無縫製ニットを編む横編機「MACH2X」と企画・デザインから生産・流通までのワークフローをフルサポートできる3Dシミュレーション搭載のデザインシステム「SDS-ONE APEX3」。世界的にも注目を集める画期的な発明である。



# 知事対談

島 正博 × 仁坂吉伸

株式会社島精機製作所 代表取締役社長  
和歌山県知事

# ピンチこそ チャンス。 きつかけに。

和歌山を代表する企業「島精機製作所」。  
世界で高い評価を得るその原動力は、  
発明力と洞察力と不屈の精神にあった。

**仁坂知事(以下仁坂)** ●この度は、世界最大級の繊維関係博物館である米国繊維歴史博物館において、アメリカ人以外で初めて殿堂入りを果たされました。おめでとうございます。

**島正博氏(以下島)** ●ありがとうございます。当社設立50周年という節目に、伝統ある博物館に外国人として初めて殿堂入りしたことは本当に光栄に思っています。

**仁坂** ●社長は若い頃から発明に熱心に取り組んでいたとお聞きました。

**島** ●60年前、世界にないものを作れば特許が取得でき、優れたものならビジネスに繋がるということを知りました。昔話ですが、高校時代の担任の先生から「島君、下駄はカタカタとうるさい音を出すから学校に履いて来ては駄目だ」と注意されましたね。だったら音の出ない下駄を作ってやろうと思ひ、二日で製作し、わざわざ先生の前を横切ったのです。先生から「まだ下駄履いてるんか?」と言われたので「先生、これは音が出ない下駄です。底にゴムを貼るような簡単なモノではなく、クッション自体を埋め込むためのドリルも自作しました」って(笑)。

考え、モノづくりの世界にのめり込んでしまったようです(笑)。実は自動車の方向指示器を最初に作ったのは私なんです。昔、フォードの副社長が来社された時、「島社長、あの方向指示器で世界特許を取っていたらとんでもない大金持ちになっていたにね」と言われました。

**仁坂** ●ええ!? 方向指示器は社長が発明されたのですか? 驚きです。

**島** ●そうなんです。その後、「繊維だったらそれに絞ってやれば絶対成功する」と先生に言われ、現在に至っています。

**仁坂** ●それでどこにもないものをつくることを目標に会社をスタートさせ、全自動の手袋編機の開発に挑戦されていますが、その当時苦労されたことやその後全自動手袋編機の完成に至るまでのお話をお聞かせしたいと思います。

**島** ●昭和20年代後半、手袋は熟練工一人が1日に2ダース編むのが精一杯でしたが、連続して編める方法を15歳の時に発明しました。機械自体は職務発明でしたが、手袋は自分の名前の特許出願し、その特許料で結婚する時には3千万円ぐらい貯まっていた。『こんなもので特許取れるんだ』たら、毎日でもいけるわい』と大口を叩いていました(笑)。

**仁坂** ●それで先生は何と言いましたか?

**島** ●「島君、面白いもん作ったな、ドリルの図面を書くだけでも二日はかかるだろう。しかし、これからは自分の仕事に関係するものを作りなさい」と言われて、だっ

たら世界中の人の役に立つモノを作ろうと

**仁坂** ●その後ゴム入り手袋編機の開発を経て、1962年に株式会社島精機製作所を興されました。そして、次の目標をニットの横編機に定め、新たな挑戦を続け、「コ



**島 正博**(しままさひろ)  
昭和12年3月10日生まれ。昭和37年株式会社島精機製作所を設立、代表取締役社長就任(現任)。平成8年東証一部上場。平成19年大河内記念生産特賞受賞。平成24年米国繊維歴史博物館に殿堂入り。

ンピュータ制御横編機」を開発。さらに一切縫製することなく三次元のニットを編み上げる機械「ホールガーマント」を世に出し、「東洋のマジック」と称されるほど高い評価を受けています。そうした結果、島精機製作所をコンピュータ制御横編機の分野では、世界の60%以上のシェアを占める大企業に成長させました。その間は順調だったのでしょうか？

**島** ●昭和49年のオイルショックでは倒産寸前に陥りました。再建を模索するなかで、コンピュータに行きつきました。従来の繊維業界では大量生産が当たり前。生地の手配から縫製工程を考えると、採算が合うロット数は1万着程度だったのですが、コンピュータ制御だと多品種少量が可能になり、

10着でも作れる。「これはいける」とひらめき、「コンピュータ制御横編機」の開発に至ったわけです。

**仁坂** ●戦後の和歌山県の産業発展史には、常に島精機さんがあります。純粋な和歌山企業で世界からこれほど高い評価を受けていることは和歌山の誇りであり、県内の多くの企業も勇気付けられていると思います。

### プレミア和歌山でブランド力をアピール

**仁坂** ●さて、和歌山県には優れた企業がたくさんありますが、その多くは広告宣伝費が潤沢ではない中小企業です。さらにどうすれば自社のブランド価値を客観的に

アピールできるのかと悩んでいます。そこで和歌山県では安全・安心を基本に、幅広い分野で優れた県産品を「和歌山らしさ」「和歌山ならではの視点で推奨する」「和歌山県優良県産品(プレミア和歌山)推奨制度」を始めました。安心・安全については品質表示がきちんとしているか？商品として供給量は十分か？さらには和歌山らしい夢があるか？というポイントを審査し認定しています。その厳しい審査に通過することですらに価値を高められ、知名度が上がるといった相乗効果も期待しています。今年、御社の「MACH2X」が「SUSONE APEX3」が「プレミア和歌山推奨品審査委員特別賞」に選ばれました。

**島** ●島精機はヨーロッパの繊維業界では有名なのですが、地元和歌山であまり知られていませんでした。しかし、今回は特別賞をいただき、「ほう。島精機はそういうものを作っていたのか」と理解されるようになり、和歌山での認知度も上昇し、本当に嬉しく思っています。

**仁坂** ●またモノづくりに対し、常に新たな挑戦を続けていらっしゃいます社長のこだわりや考え方についてお教えてください。

**島** ●作る方も買う方も使う方も得をする、「三方良し」が理想ですね。縫い目がないからほころばないし、縫い代がないからゴロゴロもしない。だから着心地がいいんです。編み方と素材の組合せを変えれば、涼しい夏のニットや温かい冬のニットができます。

それは省エネにもつながります。またホールガーマントは資源を無駄にせず環境に優しい。もちろんエンドユーザーの満足感も満たさなければなりません。

**仁坂** ●ホールガーマントには裁断や縫製という工程がないので、生地など捨てる部分がなく、地球環境の保護にもつながるわけですね。

### 日本のモノづくり復活には本当にいい物を作ることに

**仁坂** ●現在国内企業の多くが不況にあえぎ、日本のモノづくりに赤信号が点滅しています。こうした状況を打破し、モノづくり日本を復活するにはどうしたらよいでしょうか。

**島** ●やはり、どこにもないものを開発することではないでしょうか。しかも製品だけを作るのではなく、部品まで全部作ります。そうすれば図面は外部へ出ないので、現物を測定して類似品を作っても測定誤差が生じるので高精度なものは誰にも作れません。すぐ真似されるということにはならないわけです。

**仁坂** ●和歌山は元々技術力が高く、部品や部材といった中間製品を製造している企業が多く、モノづくりの伝統を有する地域です。その反面、下請けが多く自社ブランド製品が少なく、取引先が海外生産に切り替えること立ち行かなくなる。だから単純な下請けから、自社ブランドを持つ競争力のある企業に変貌していく必要があると考えています。そのため



左/最初に作った無縫製の手袋がホールガーマントに進化した。右/見るだけではどちらが本物か分からないほどの優れた再現能力のおかげで、見本生地を作る必要がなくなり、製品化はスピードアップしコストが下がり、さらにはエコにもつながる。(手前が出力したもの。奥が実際の生地)

**島** ●10月に「株式会社SHIMA」という新会社を立ち上げました。これはホールガーマントを中心にした最新のシステム機器を使って、十分採算のあうビジネスモデルを提唱する会社です。

**仁坂** ●爆発的にヒットした消費財は、新しい消費生活を創造します。メーカーの方がマーケットを作るわけですね。それがホールガーマントを使うところなるんだ！というモデルを自分で実践していく。これは非常に素晴らしい企画です。日本はかつて繊維王国でしたが、コスト面で途上国との競争に負け、縫製過程の大部分は海外へ移転しました。しかし、ホールガーマントは人件費のかかる縫製過程が不要なので、購買力

のある消費国で生産できる。それは繊維産業に大きなインパクトを与えていると思います。

**島** ●県からも様々な支援をいただき、ようやくここまでできました。この厳しい時こそ過去50年を振り返り、今後の指針にしなければなりません。振り返ると危機的な状況もありましたが、その度に多くの人に助けられました。

**仁坂** ●最後になりましたが、成功の秘訣をお教えてください。

**島** ●「ピンチこそチャンス」のきっかけにしなければならぬ」ということでしょうか。

**仁坂** ●なるほど。本日はお忙しいところ貴重なお話を聞かせていただき誠にありがとうございました。ありがとうございました。

にも技術開発が必須で、これから伸びそうな企業や特定の分野にターゲットを絞り、技術開発の助成や補助制度を設けています。もうひとつは販売機会の拡大です。世界の市場はますます拡大していくと予想されており、御社が和歌山県内企業に道筋を示したように、海外での販売を視野に入れなければなりません。そのために海外の見本市に出展するといった販売促進も重要視しており、本県ではそうした支援策も実施しています。このように、和歌山県では様々な企業支援を行っています。社長から和歌山県内の企業や県への意見やアドバイスを聞かせてください。

**島** ●和歌山県の企業はPRが上手くないと言えますね。しかし、世界から注目を集めるとモノづくりに気合いが入ります。そしてたくさん売れるといいモノが安く作れる。それでまた売れる。そういう良い循環を作らなければなりません。

**仁坂** ●日本経済は今、低迷していますが、本当にいいモノの価値は世界的に普遍です。そういうモノづくりにこだわることで、和歌山も企業もさらに発展していくのではないのでしょうか。

これからの展開に見える新しいビジネスモデル

**仁坂** ●御社は、今年、創立50周年を迎えられました。今後の目標や新しい展開などについてお聞かせください。

# 知事対談

## 島 正博 × 仁坂吉伸

株式会社島精機製作所 代表取締役社長  
和歌山県知事



**仁坂吉伸**(にさかよしのぶ)  
和歌山県知事